

卒業生の皆さん、卒業おめでとう。

早春の緑のシャワーを浴びながら、バス停から学内の通路、通称「心臓破りの坂」を歩いていくと「ホーホケキョ」の鳴き声。「春告げ鳥」と呼ばれ、四月から七月までウグイスがさえざり、歩を進めるとオーブンテラス付きの緑に囲まれたカフェテラス、ルーヴル美術館を思わせる芙蓉館。春の若葉・夏の新緑・秋のどんぐり・冬の雪景、四季折々の美しくやさしさあふれるキャンパスで学んだ二年間でした。

本日は、後援会長 山岸朱美 様 同窓会長 高橋千鶴 様 そして学園から岡理事長 山村寛前理事長 山村正巳本部長の各皆様にご臨席をいただきありがとうございます。

さて皆さんは「なぜ、花は咲くのか」考えたことがありますか？

一つは、ハチやチョウに「ここに花が咲いているよ」と教えているのです。目立つ色でハチやチョウなどの昆虫を誘い、寄ってきてもらって花粉を運んでもらい、子孫(タネ)をつくるためです。植物は動物と違い、動くことができません。動物の力が必要で、そのために蜜などを報酬として動物に与え、主に昆虫ですが、その代わりに花粉を運んでもらいます。そのためには鮮やかな花びらやよい香りで動物の目に留まるようにするのです。

デッドホースアラムというサトイモの仲間の花は、くさい臭いを放出することで“動物の死体”に似せ、ニクバエの仲間を騙して花に呼び寄せ、技を使います。また、オーストラリアのランの仲間ハンマーオーキッドという植物は、昆虫が使うフェロモンと同じ物質を出し、花をメスだと勘違いしたオス蜂に花粉を運ばせるということです。本当に涙ぐましい努力と工夫をしているんですね。まさに「すごい」の一言です。

昆虫などの虫だけではありません。鳥などの動物もそうです。植物にとって実を食べてもらうのは、何よりも大事なことです。食べてもらえば、実の中にあるタネを糞といっしょにどこか遠くに排泄して、そこから芽が出て子孫を増やすことができます。動きまわることができない植物にとって、知恵を身に付けて生活の場を移動したり、広げたりする「すごい」技を身に付けていると言えるでしょう。

ここで本を一冊紹介します。TBSの「金スマ」に出演した「渡辺和子」という方の「置かれた場所、咲きなさい」という本です。この方は、昭和十一年二月二十六日に起こった、いわゆる二・二六事件、昭和史最大クーデターによって暗殺された数人のうちの一人の次女です。その時わずか九歳、目の前の出来事でした。そんな境遇にあって、もたくさん学び、アメリカに渡り、その後岡山にあるノートルダム清心女子大学の教授、学長、そして現在理事長となっています。

この本のタイトル「置かれた場所で咲きなさい」・・・置かれた場所で咲くということは、仕方がないときをあらわることではありません。就職しても、結婚しても、子育てをしても、「こんなはずじゃなかった」と思うことが次から次へと出てきます。そんな時にも、その状況の中で「咲く」努力をしてほしい。どうしても咲けない時もあります。風雨が強いとき、日照り続きで咲けない日、そんな時には無理に咲かなくてもいい。その代わりに、下へ下へと降りて根を張るのです。次に咲く花が、より大きく美しいものとなるために・・・

誰しも生まれた場所や置かれた境遇を選ぶことはできません。しかし、生き方を選ぶことはできます。「現在」というかけがえのない時間を精一杯生かすことです。誰かに咲かせてもらえると思つたら間違いです。自分が置かれた場所で咲かなきゃいけないと気付くことです。このようなことが書かれている本なので、世の中のたくさんの人に影響を与えています。

卒業生のみなさんのほとんどが就職する保育園や幼稚園、そして施設など。その置かれた場所で、大きく、そして美しく咲く努力をしてください。植物の花の咲く意味をかみしめながら・・・置かれたところこそが、今のあなたの居場所なのです。

さて、保護者の皆様に一言ご挨拶を申し上げます。ご卒業、本当におめでとうございます。

「卒業」、それは新たな道への旅立ちであり、希望に溢ら溢れたときでもあります。しかし、それは同時に、親しい友との別れのとときであり、おそらくは終生心に残るであらう人生の節目のときでもあります。世間の荒波に立ち向かうときでもあります。道と間違わないよう、ぜひもうしばらく温かく見守ってあげてください。

卒業生の皆さん、「さいたま景観賞」を受賞した、緑あふれるこのキャンパスを愛し、この学園に学んで良かったと思える学園生活、そして本短大の校歌にも歌われている「友よ やまむら」にあるように、人生にとってかけがえのない友をつくることができましたこと、そして置かれた場所で精一杯咲くことを期待して、式辞といたします。

平成二十八年三月十六日

学校法人

山村学園短期大学

学長

野口一夫